

令和2年度

No 7 12月18日

松 籟



発行者
穴水秀人

2学期が終わります

新型コロナウイルスとともに歩んできた2学期も、まさに幕を閉じようとしています。振り返ると、「例年通り」「これまでを踏襲」というフレーズが死語となり、出口の見えない大きな問いに正対し、生徒や教師一丸となって、私たちなりの解答を導き出してきた学期であったと言えるでしょう。

16日(水)に今年度の生徒会活動の総括となる生徒総会が開かれました。冒頭、河田生徒会長のあいさつの中に「新型コロナに向き合い、みんなで知恵を出し合いながらそれを乗り越え、何とか成果を出すことができた。」旨の内容が込められていました。「まさにその通り!!」私は、大きくうなずき、心の中で相づちを打ちました。それに呼応して、私のあいさつの中でも、以下のようなたとえ話を生徒に伝えました。

靴を販売するある会社が、販売実績を上げる目的で、ある南国の島国にA、B2人の社員を派遣し、視察をさせました。2人は、個々にその結果を社長に報告しました。Aは、このように報告しました。

A: 社長! この島での靴販売は無理です。なぜなら、この島の住民は靴を履くという習慣がないからです。

では、Bは何と報告したでしょう。あなただったらどのように報告しますか?

この問いを河田生徒会長に尋ねたところ、このように答えました。

B: 社長! この島は最高のマーケットです。なぜなら、この島の住人は、まだ誰も靴を持っていないからです。

この問答はあまりにも有名ですから、もしかしたらどこかで耳にしたことがあるかもしれませんが、まさにこの発想の大切さを皆さんと再確認したかったのです。

話を戻しますが、私たちの前に「新型コロナウイルス」という高く分厚い壁が立ちふさがりました。この壁の前で何もせず、時が過ぎるのを待つことも選択肢の一つですが、私たちは、壁を崩せなくても何とか回り込み、あるいは地面に穴を掘ってでも、壁の向こうに行こうと悪戦苦闘し、一定程度の成果を出したのです。本当によく頑張りました。

新型コロナに限らず、私たちのこれからの人生には、いくつもの壁が立ちふさがります。しかし、発想を変えると何かが見えてきます。それが突破口となり、思いもよらない大きな財産を得ることができるかもしれません。最後に、アメリカ合衆国第16代大統領「エイブラハム リンカーン」の言葉を紹介して、令和2年を締めくくろうと思います。

今、あなたの前に立ちはだかる「壁」は高いかもしれない。

でもそれは「扉」かもしれない。